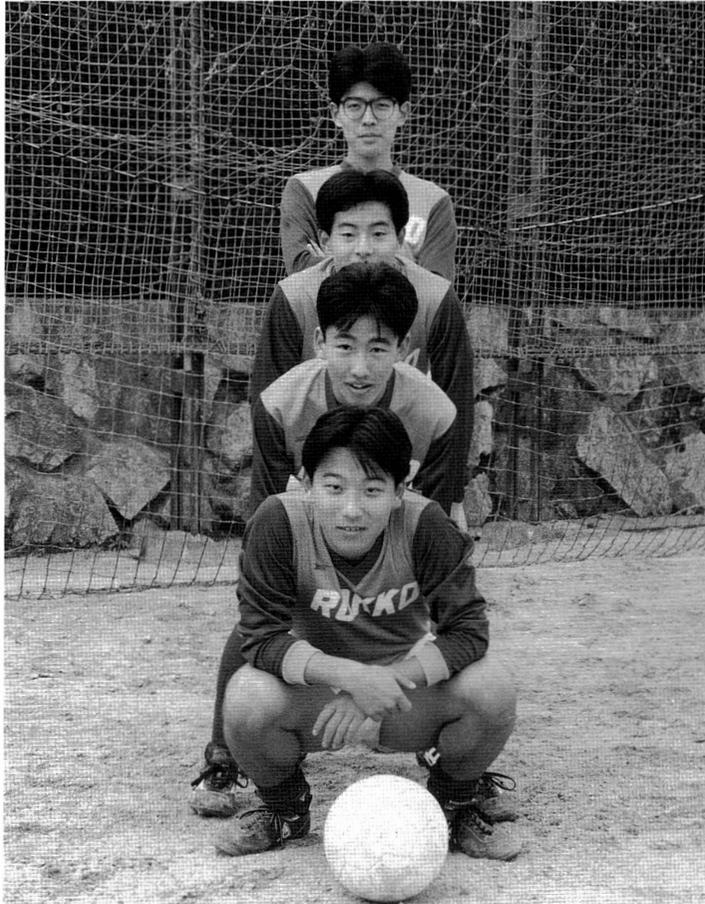




1985-1991

チームワークで総体奇跡の3位！



上から有川・千原・河野・山本（引退後の写真）

48期の6年間

中学時代の試合の中でまず思い浮かぶのは、中学3年の春の市民大会の神戸FCとの試合である。その頃は、まだ48期にも20人位いたのである。この試合は、一方的な試合で、ハーフウェイラインを越えることは、ほとんどなかった。結局12-0で大敗してしまった。翌日、佃先生に「1ダースも点を取られてどうするんじゃ」と怒鳴られたことは、今でも覚えている。

もう一つ思い出すのが、中学3年の夏の総体である。最初は、1回戦か2回戦で負けるだろうと思われていた

が、1回戦に勝ち、2回戦では、PKを止めたり、キーパーがトンネルしたり、自殺点があったりと色々な事が起こったが、メッシュのユニフォームを着て全員気分を良くしていたのでなんとか勝つことが出来た。これで波に乗り、神大附属にも勝つことが出来た。しかし、準決勝の広陵戦では、前半に4点を取られ、後半も1点を取るのが精一杯で結局5-1で負けてしまった。ここまで1点差で勝っていただけにこの大敗は残念であったが、3位になれたことは非常に嬉しかった。

高校時代は、部員が減ってしまったことが思い出される。高校1年の春に、10人位になり、高校2年の春に、とう

とう4人になってしまった。そのため、上の学年と下の学年に埋もれてしまう存在になってしまった。

次に思い出されるのが、和歌山遠征である。48期が高1だった冬から和歌山へ遠征するようになり、現在も続いている。この遠征は、県外のチームと試合をする唯一の機会だったので非常に為になった。高1の時の遠征で北陽に勝って大喜びした事は、今でも思い出される。

しかし、高2になると大幅に戦力が落ち、秋季リーグの初戦の神戸弘陵戦の前半1-0で勝っていた所までは良かったのだが、後半に7点入れられてから調子が狂い、「勝利を知らないチ

ーム]になってしまった。その結果、2部に落ち、更に春季リーグで3部まで落ちてしまった。

48期は、輝かしい成績は残さなかったが、多くの問題を残した学年だった。

[山本 順司 千原 均]

●48期のサッカーマン達

[河野 直明]

山本 順司

言わずと知れた48期のキャプテン。みんなから「ジュンジ」の愛称で親しまれ、信頼厚いゲームメーカー。常に技を磨いて、みるみるうちにうまくなった。「苦しい時のジュンジだのみ」は、パスに困った時やドリブルで行き詰まった時の常識中の常識。この常識は未だ生きている。学年で唯一、中央球技場の芝を踏んだ男。

千原 均

通称「チーチャン」。体は細いが、表情を変えないクールなドリブルで奮闘。しかし、僕と同様に佃先生の攻撃的となる。まだまだ現役サッカーマン。神戸大学サッカー部で練習練習の日々（早くレギュラーになれるよう頑張ってください）。サッカーがどこまでも好きな人間のひとりと言えるだろう。

有川 典宏

とにかく声を出して盛り上げる。それが「アリ」。

とにかく我慢強い。それが「アリ」。

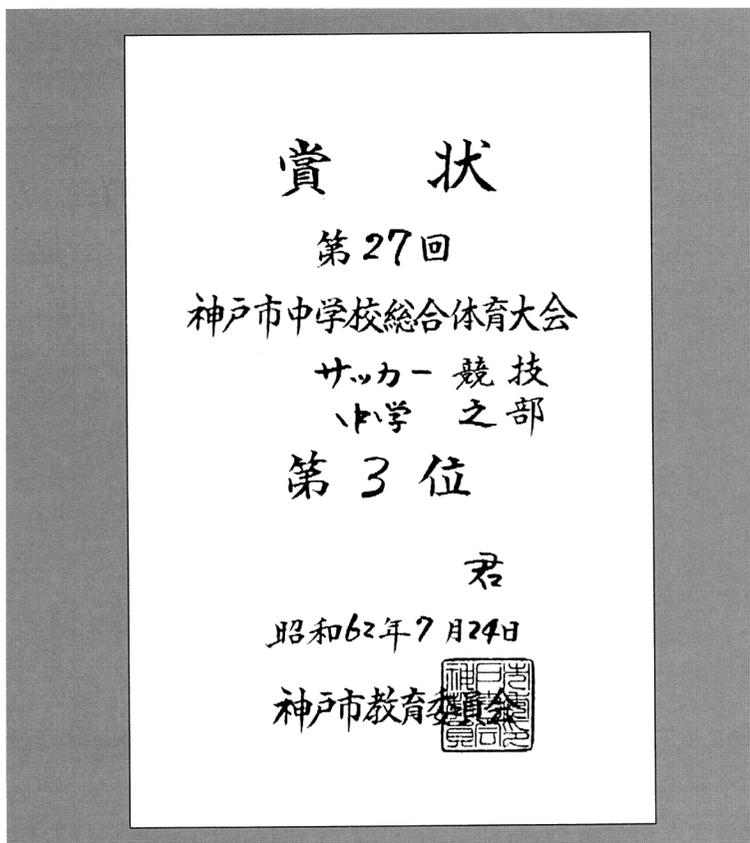
とにかく真面目である。それが「アリ」。

とにかく話がわかる奴。それが「アリ」。

6年間一緒にサッカー出来て本当に良かったと思う。それが「アリ」。

河野 直明（執筆者）

何もしない副キャプテン。怒られてばっかし。体格は良くないし、得意技もありません。そんな僕でも神戸弘陵から1点取れました。「ジュンキ」と呼ばれた勝手なMFは、いつも縁起だけは担ぐようにしていました。



中3の総体で神戸市3位になった時の賞状